

9月4日のウクライナ情報

安齋育郎

●マクロン大統領がアルジェリアでもてなされ方(2022年9月3日)

マクロン「メルシー！」、群衆「失せろ！」

<https://twitter.com/i/status/1565750978045161472>

マクロンがガス乞いにアルジェリアを訪れたときの映像です。集まる群衆に「メルシー！」って手を振っていますが、群衆が叫んでいるのは「失せろ！アルジェリアは永遠に！」でした。植民地政策のつげですかね。



●ロシア国防省発表のウクライナ軍損失(2022年9月2日)

日本では南部反転攻勢と呼ばれている作戦で、ウクライナ軍は大量に兵と武器を失っている。Su-25 2機、MiG-29 1機を撃墜(Andreevka, Kherson)



ロシア軍戦果詳細

Sep 2, 2022

戦況はこういうことなんでしょうか？

ニコラエフ-クリヴォイ-ログ戦線

ウクライナ軍は失敗の作戦を続けている
たった1日で、敵は戦車13台、歩兵戦闘車19台、大口徑砲付き車両11台、兵330人を失い、2名が捕虜となった
Su-25 2機、MiG-29 1機を撃墜。アメリカ製対レーダーミサイルHARMのを登載していた(Andreevka, Kherson)

高精度ミサイル(空)

第17戦車旅団(Bereznevatoye)と第46航空旅団(Nikolaev)の武器保管用要塞を破壊。40人のナチス死傷、10基の軍設備破壊
第56自動車歩兵旅団の各司令官を破壊(Mikhailovka, Donetsk)
司令部で18人の兵死亡、うち12人は将校、31人が負傷。
第110機械化旅団は甚大な損失により、戦闘拒否、持ち場を捨てた(Avdeevka, Opytnoye, Donetsk)

集中攻撃

第60歩兵旅団、30人のナチス死亡、15人負傷(Dobryanka, Novovorontsovka, Kherson)

陸軍航空隊+ミサイル隊

Olha隊破壊 x 1 (Novomariyivka, Nikolaev)
司令部 x 8 (Kharkov, Donetsk, Zaporozhye, Nikolaev)
砲撃ユニット x 42
軍キャンプ x 134
ミサイル砲弾庫 x 6 (Kharkov, Donetsk, Nikolaev)
Buk-M1地对空ミサイル x 1 (Donetsk)

防空隊

UAV撃墜 x 12 (Kharkov, Donetsk, Zaporozhye, Kherson)
アメリカ製HARM対レーダーミサイル阻止 x 1 (Kherson)
HIMARS阻止 x 14 (Donetsk, Kherson)

●ロシアのルハンスクへの支援活動(2022年9月1日)

ロシア中部軍が食べ物と学校で使うものをルハンスクにお届け！昨日9月1日は学校開始でした。地下で暮らしていた子、ウクライナの砲撃で親を亡くした子などもあります。学校で自分の言葉が話せるようになって良かった。

<https://twitter.com/Jano661/status/1565740613773176833?s=20&t=Q-M6sCLyvUMVOEdzkUeSQQ>



この女性は先生かな？

●G7が勝手にロシア石油に上限価格設定(RT、2022年9月3日)

G7の財務大臣たちは、ロシア石油の上限価格設定を決めて効果的にするために最終の詰めに入ったという。

ロシアの反応は、当然ながら、「上限設定しない国に売る」。ロシアの資源を欲しい国は沢山あるから、困るのはG7だろうと言われている。

2 Sep, 2022 13:11 / Home / Business News

G7 unveils plan to enforce Russian oil price cap

The Group of Seven agrees to block transport of crude sold above the set price



The finance ministers of the Group of Seven influential nations announced on Friday their intention to ban maritime services transporting Russian oil if its price is not approved by 'international partners.'

"We commit to urgently work on the finalization and implementation of this measure," representatives from the US, Canada, Germany, France, Italy, the UK and Japan said in a joint statement seen by AFP, without specifying the cap level.

"We seek to establish a broad coalition in order to maximize effectiveness and urge all countries that still seek to import Russian oil and petroleum products to commit to doing so only at prices at or below the price cap," they added.

© Sputnik / Vitaly Timkiv

●IAEA の活動に対してウクライナ政府の反応(2022年9月3日)

ゼレンスキーの大統領顧問:「IAEA、国連、アムネスティ、赤十字は素人」

ついでにね、IAEA！

Jano66ロシア情報
<https://www.rt.com/russia/562053-iaea-mission-podolyak-interview/>
国連、IAEAなど国際機関は信用ならない - ウクライナ大統領最高顧問

IAEAの調査団の活動に対して、ウクライナ政府は「腰抜けで信用ならない」と発言。
ゼレンスキーの大統領顧問は、「国際機関の活動は気に入らない。効果はないし、腰抜けで、究極に素人だ。」とインタビューで述べた。さらに「IAEAだけでなく、国連もアムネスティも、国際赤十字も信用しないのが基本だ」と述べ、今回のIAEAの活動に何も期待していないと語った。

やはり実地調査は大事です

RT
UN nuclear watchdog should be mistrusted 'by default' - Zelensky aide
Ukrainian presidential advisor Mikhail Podolyak expresses his low expectations from the IAEA inspection to the Zaporozhye power...



👤 2 👁 14 Jano66, edited 23:24

●ロシアの「特別軍事作戦」発動の理由付け(復習、2022年2月24日)

プーチン演説(趣旨は極めて明快)

国連憲章第 51 条第 7 項に基づき、

ドネツク人民共和国

ルガンスク人民共和国との

友好、相互支援条約に基づき

特別軍事作戦を実行することを決意した

<https://twitter.com/i/status/1496935023316172800>

●ジョージ・ソロス帝国の野望(2022年3月10日)

ソロス帝国 の野望にはプーチンの活力と EU 分裂が障害だが、ロシア崩壊戦略にウクライナに干渉

し、25年の成果が実ったと満足げなソロス。つまりカラー革命も2014年のクーデターもユダヤ・ネオナチ組織も彼自身の計画と投資で、マケインやグラハムがウクライナで対ロシア戦を鼓舞した経緯について、ソロス自身の告白している。

<https://twitter.com/TomokoShimoyama/status/1501682071198126082?s=20&t=Orl5jAHEiyPBxjIQY8G-Hw>

※安齋注:ジョージ・ソロスはハンガリー系ユダヤ人の投資家。投資家であると同時に、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスで哲学の博士号を得た哲学者であり、政治運動家、政治経済に関する評論家としても活動している。自身を「国境なき政治家 ("stateless statesman")」と称す。

●ウクライナ兵曰く、「捕虜になって有難かった」(2022年9月3日)

正直だなあ、この兵士！

<https://www.youtube.com/watch?v=ZNK6ZOXpNK8>

●大前研一「プーチンの怒りの根源を見抜けなかったゼレンスキー大統領は、決して英雄なんかではない」(PRESIDENT Online、2022年6月8日)

ロシアのプーチン大統領は、なぜウクライナ侵攻を決断したのか。ビジネス・ブレイクスルー大学学長の大前研一さんは「ゼレンスキー大統領は、対ロシア外交で致命的なミスを犯した。プーチン氏からすれば、ゼレンスキー氏こそが『紛争の種を蒔いた張本人』という気持ちだろう」という――。

ロシアの軍事侵攻が始まって以来、首都キーウ(キエフ)にとどまって、連日悲痛な顔で徹底抗戦の意志を発信し続けるウクライナのウォロディミル・ゼレンスキー大統領の姿を、西側メディアは英雄であるかのように報じている。また、多くの西側諸国において、ゼレンスキー氏に議会でオンライン演説をさせて、拍手喝采で迎えている。

だが、プーチン大統領になり代わって“ロシア脳”で考えてみると、ゼレンスキー氏は決して英雄ではない。むしろ、彼こそが今回の紛争の種を蒔いた張本人だと言っていい。

実際、彼がウクライナの大統領でなければ、プーチン氏も国境を越えて自国の軍隊を送り込むなどという暴挙に出ることはなかっただろう。

ソ連崩壊により1991年に独立を果たしたウクライナでは、レオニード・クチマ、ヴィクトル・ユシチェンコ、ヴィクトル・ヤヌコーヴィチ、ユーリヤ・ティモシェンコなど、国民のことよりも自身の保身と蓄財に熱心な人間ばかりが大統領や首相に就いてきたという歴史がある。そういう意味ではゼレンスキー氏にかぎらず、ウクライナはもともと政治家に恵まれていない国であると言える。

よく知られているように、ゼレンスキー氏の前職はコメディアンだ。あるとき、彼は『国民の僕』という政治風刺ドラマで、後に大統領になってしまう歴史教師の役を演じた。これが大ヒットすると、勢いでドラマのタイトルと同じ「国民の僕」という政党をつくって党首となり、2019年の大統領選に出馬したところ、70%を超える票を獲得して当選してしまったのである。

ところが、実際に大統領に就任すると、政治家としては素人なので当たり前だが、内政でも外交でも失策が続き、支持率はたちまち20%台にまで急落してしまった。

そこでゼレンスキー氏は起死回生の策として、ウクライナをEU(欧州連合)とNATO(北大西洋条約機構)のメンバーに入れると言い出したのである。

ウクライナ国内で連日ロシアとの激しい戦闘が続く中、メディアの前に登場するウクライナ人は、軍人、民間人にかかわらず、誰もがウクライナという自分の祖国を心から愛しているように見える。戦時下において愛国心が高揚するのは自然なことだ。

だが、私はロシアだけでなく、ウクライナにも何度も足を運んでいるが、これまで「何があってもこの国に骨を埋めたい」というような愛国者に会ったことがなかった。

自国の政治家に期待できないこともあって、多くのウクライナ人、とくに30~40代の働き盛りの人々は、ウクライナを出て外国で仕事をしたいと思っている。みな必死に勉強して、ビジネスコミュニケーションに必要な英語と、ITや理系の高度なスキルを身につけ、それらを武器に脱出を図ろうとしているのだ。同様の傾向は、同じ元ソ連構成国

である隣国のベラルーシでも見られる。

だから、ゼレンスキー氏が本当に EU 加盟を実現させてくれるのであれば、ウクライナ人にとってこんなにありがたいことはないのだ。EU のパスポートを持っていれば、シェンゲン協定によって、EU 域内を自由に移動することができる。また、ヨーロッパ中での就職も可能になるからである。

これは効果てきめんだった。なぜなら、NATO はともかく、EU 加盟はウクライナ人にとってメリットが大きいからだ。

ただし、EU に入るには厳しい基準をクリアし、さらに現加盟 27 カ国すべてに承認されなければならない。ハードルが高いため、非常に時間がかかるのが通例だ。現時点で最も新しいメンバーのクロアチアも、2013 年 7 月に加盟が認められるまで 10 年かかっている。

しかも、現在はまだトルコ、北マケドニア、モンテネグロ、セルビア、アルバニアが順番を待っている状況であり、ウクライナの加盟が認められるにしても、ずっと先にならざるを得ない。

そう考えると、ゼレンスキー氏の EU 加盟宣言は、実は極めて実現性の低い口約束だったのだが、それでもウクライナ国民はこれを歓迎したのである。

しかし、ロシアのプーチン大統領にとってみれば、このゼレンスキー氏の EU や NATO 入り発言には、絶対に見過ごすわけにはいかない理由がある。

1991 年 12 月のソ連崩壊前後、連邦を構成してきた 14 の国(リトアニア、ラトビア、エストニア、ウクライナ、ウズベキスタン、カザフスタン、ベラルーシ、アゼルバイジャン、ジョージア、タジキスタン、モルドバ、キルギス、トルクメニスタン、アルメニア)が次々に独立した。

そして、2000 年代には旧ソ連構成国のエストニア、ラトビア、リトアニア、および衛星国だった東欧のチェコ、ハンガリー、ポーランド、スロバキア、ブルガリア、ルーマニアが厳しい条件をクリアして、相次いで EU に加盟した。

こうして旧ワルシャワ条約機構の国々は、次々に自由主義陣営に取り込まれて、今やベラルーシとウクライナを残すだけになってしまった。

ベラルーシは、独立以来、親ロシア派のアレクサンドル・ルカシェンコ氏が 30 年近く大統領を務めている。同国は 1992 年に発足したロシアと旧ソ連構成国のアルメニア、キルギス、カザフスタン、タジキスタンからなる軍事同盟「CSTO(集団安全保障条約機構)」の一員であり、1999 年には両国の政治、経済、安全保障などを段階的に統合するロシア・ベラルーシ連合国家創設条約も締結するなど、ロシアとほぼ一体化していると言っていい。

一方、ウクライナの歴史を紐解くと、ロシアとの関わりはベラルーシよりも深いことがわかる。現在のウクライナの首都キーウは、9 世紀から 13 世紀にかけて存在したキエフ大公国の首都だった。そして、ロシア人のほとんどが信仰しているロシア正教は、キエフ大公国の正教会から派生したと言われている。つまり、ロシアにとってウクライナは、親のような存在なのだ。

ウクライナはソ連からの独立後、ロシア寄りと欧米寄りの政権が交互に入れ替わりながら、ロシアを刺激しないように中立を保っていた。ところが、ゼレンスキー大統領は、「自分たちは EU にも NATO にも入る」と宣言してしまった。ロシアのプーチン大統領からすると「親子なのにどういふつもりだ」と、ゼレンスキー氏の態度に怒り心頭だったであろうことは想像に難くない。

しかも、ウクライナが NATO に加盟した結果として、ロシアとの国境近くにミサイルが配備されると、モスクワまで約 700 キロメートルしかないのだ。

ロシアという国は広大な国土を持つ大国であるが、逆に言えば 16 もの国々と国境線を持ち、何度も侵略されてきた歴史を持つ。

有名なところでは、帝政ロシア時代の 1812 年に起こったナポレオンのロシア遠征、第二次世界大戦におけるナチスドイツの侵攻(独ソ戦)が挙げられる。第二次世界大戦でソ連は戦勝国であるにもかかわらず、敗戦国日本の死者数約 300 万人の 9 倍にあたる約 2700 万人もの死者を出している(※諸説あり)。ロシアでは、前者は「祖国戦争」、後者は「大祖国戦争」と呼ばれており、国土を脅かされることは極めてナーバスな問題なのである。

このような歴史的経緯もあり、ソ連は冷戦期に東欧諸国を支配下において、NATO との緩衝地帯としてきた。しかし、冷戦が終結して、東欧諸国が EU や NATO に次々と加入したほか、かつてのソ連構成国も独立を果たした。ソ連を引き継いだロシアとしては、かつての勢力圏が西側にどんどん削り取られているという危機感があるのだ。

だから、ロシアとしてはウクライナやベラルーシを緩衝地帯とするために、NATO への加入を絶対に阻止したいのである。国防上、ゼレンスキー氏の発言を許すわけにはいかなかったのである。

ウクライナ侵攻から 2 カ月余りが過ぎた 2022 年 5 月 9 日の戦勝記念日の式典で、プーチン氏はゼレンスキー政権を反ロシアの「ネオナチ」と決めつけ、NATO に対してもウクライナを支援していると侵攻を正当化したが、背景に

はこのような事情があるのだ。

プーチン氏の逆鱗に触れたゼレンスキー大統領のミス

ゼレンスキー氏はもうひとつ、ウクライナの大統領として致命的なミスを犯した。プーチン氏が絶対に触れてほしくない核問題に踏み込んでしまったのだ。

ウクライナは旧ソ連における核開発基地だったため、ソ連解体後も大量の核が残されていた。しかし、独立国家となったウクライナが核を保有し続けることを、国際社会は認めなかった。

そこで、1994年12月、ハンガリーの首都ブダペストで開催されたOSCE(欧州安全保障協力機構)会議で、「ウクライナがベラルーシ、カザフスタンとともにNPT(核拡散防止条約)に加盟すれば、協定署名国がこの3国に安全保障を提供する」という内容の覚書(ブダペスト覚書)に、アメリカ、ロシア、イギリスが署名したのである。このブダペスト覚書によって、ウクライナは非核兵器国となった。

ところが、ゼレンスキー氏は自身の支持率回復を狙うために、「ロシアによるクリミア併合のようなことがウクライナに起こるのは、自分たちに核がないからだ」と、ブダペスト覚書に異議を唱えるような発言を始めた。

これはロシアにとって大問題だ。なにしろウクライナは核開発のノウハウを持っており、優秀な技術者も多数有しているのだから、その気になれば、実際に核を保有できてしまうのである。

このような事情で、今回のウクライナへの武力侵攻で、プーチン氏は真っ先にチョルノービリ(チェルノブイリ)原発を占領させたのだ。チョルノービリは1986年4月の原発事故以来、すでに機能していない。しかしながら、使用済み核燃料が保管されている。言い方を換えれば、チョルノービリには、核兵器の材料となるプルトニウムが山のようにあるのだ。ロシアとしては、ウクライナに核兵器をつくらせないために、これを押さえる必要があったのである。

ロシア軍はさらに、ウクライナ南東部に位置するザポリージャ(ザポロージェ)原発を占拠し、その西にある南ウクライナ原発にも迫っている。おそらくウクライナ国内で稼働中の15基すべての原発が標的になっていると思われる。

加えてプーチン氏はここにきて、証拠も示さぬまま、「ウクライナが放射性物質を拡散するダーティーボム(汚い爆弾)を開発している」という主張も始めた。

また、ウクライナは2014年に発生した「ロシア・ウクライナ紛争」以来、東部の石炭産出ができなくなり、さらにロシアに頼っていた天然ガスも不払いなどを理由にしばしば止められるようになったため、電力供給の原子力発電に対する依存割合が年々増し、現在は6割弱を原子力発電でまかなっている。ウクライナはフランス、スロバキアに次ぐ原子力発電依存国なのだ。

したがって、ロシアがウクライナの原子炉15基をすべて押さえて停止させたら、ウクライナ全域がブラックアウトして、工場も操業できなくなる。つまり、工業を全部乗っ取ることができる。そうしたら、さすがのウクライナもへたってしまうだろう。

だが、どんな理屈で自分たちの行為を正当化しようと、原発に対する攻撃だけは許されるものではないし、絶対に許してはならない。

以上のように「我々はEUとNATOに入る、核も持ちたい」と平然と口にするウクライナのゼレンスキー大統領に対し、ロシアのプーチン大統領はかなり立腹していたに違いない。そして、ゼレンスキー氏が次にとった態度で、プーチン氏は完全に堪忍袋の緒が切れた。ミンスク合意の破棄だ。

2014年3月、ロシアがウクライナ南部のクリミア半島を併合した後、親ロシア派武装勢力がウクライナ東部のドネツク、ルハンスク(ルガンスク)2州の一部地域を占拠したことで、紛争が勃発した。翌2015年2月、ロシア、ウクライナ、ドイツ、フランス4カ国の首脳が、ベラルーシの首都ミンスクで会談を行い、なんとか停戦合意がまとまった。これがミンスク合意である。

この合意の中には、「ウクライナ東部親ロシア地域に『特別な地位』を与える恒久法の採択」という項目がある。ドネツク、ルガンスクの東部2州の住民は、ロシア系が約4割を占める。そのロシア系の多い東側の地域(ロシア系が7割に達すると言われている)に、ウクライナは「自治権」という特別な地位を与えることになっていたのだ。

ところが、自国の東部地域をロシアに実効支配されるのを恐れたウクライナは、ロシアからミンスク合意の履行を迫られても、なかなか実行しようとしなかった。国連安保理も2015年にミンスク合意の履行を求める決議を全会一致で承認していた。

大前研一『大前研一 世界の潮流 2022-23 スペシャル』(プレジデント社)大前研一『大前研一 世界の潮流 2022-23 スペシャル』(プレジデント社)

しかし、2019年に大統領に就任したゼレンスキー氏は、そんなことはおかまいなしに、国内世論を意識して「東部2州に『特別な地位』を与えるつもりはない」と、堂々と口にし始めたのである。

そこでプーチン氏は今回、強硬手段に出た。2022年2月15日、ロシア下院が「ドネツク人民共和国」と「ルガンスク人民共和国」を国家として承認するようプーチン氏に求める決議を賛成多数で採択すると、同2月21日、プーチン氏は先の2国を独立国家として承認する大統領令に署名、同時にこれらの地域を守るために軍の派遣を指示したのだ。

「非はあくまでミンスク合意を履行しないゼレンスキーにある」というのが、プーチン氏の主張なのである。ロシア脳で考えるとそうなるのだ。

ドイツの首相が現在のオラフ・ショルツ氏ではなく、2021年12月に退任したアンゲラ・メルケル氏であれば、今回のロシアのウクライナ軍事侵攻は防げたのではないかという見方もあるようだ。

確かにメルケル氏は首相在職中、プーチン氏と非常に良好な関係を築いており、彼の性格もよくわかっていたはずだ。また、ミンスク合意を締結したときの当事者の一人でもある。そう考えると、もし彼女がドイツの首相のままであれば、プーチン氏ではなくゼレンスキー氏に対して、ミンスク合意の履行を強く迫ったのではないだろうか。そして、彼女ならそれができたはずだ。

そのメルケル氏はロシアの軍事侵攻以後、ずっと沈黙を守っている。やはり忸怩たるものがあるのだろう。

●イラン外相、「西側はウクライナ問題解決への我が国の寄与望む」(Pars Today, 2022年8月31日)

イランのアミールアブドラーヒヤーン外相が、「西側は、イランがウクライナ問題の解決において役割を果たすことを望んでいる」と述べました。

国際通信イランプレスによりますと、アミールアブドラーヒヤーン外相は31日水曜、ロシア・モスクワ入りしました。

同外相は同日、ロシアのラブロフ外相と会談する予定になっています。

アミールアブドラーヒヤーン外相は、出発前の30日火曜夜、「今回の訪問の主な目的は、イランからの要請に基づきウクライナ危機の解決に取り組むことにある」と述べています。

また、「(ロシアとの)二国間関係およびアフガニスタン問題も、今回のロシア訪問で行う協議の議題に挙げられる」と説明しました。

イラン外相は、ウクライナ危機が発生してからこれまでに、ウクライナ外相のメッセージを2回、ロシア側に伝えていきます。



※安齋注: 欧州諸国の中には、アメリカの指図で強がってはいるものの、ウクライナ戦争への武器供与などさっさとやめて、ロシアとの関係を含めて復旧したいと思っている国が少なからずあるが、何しろ戦況において優勢なわけでもなく、対ロ制裁措置が有効に作用しているどころか自国に跳ね返っている状況でもあり、やめるにやめられない袋小路に入ってしまった。500年来の大干ばつもあり、誰かが「メンツ」の立ちそうな案でも早く言ってくれないと、それこそ冬を越せない。藁にも縋る気持ちでイランに役割を期待することになったのか？